京都府立大学学術報告（人文）第69号　（2017年12月）

キルギス族叙事詩『マナス』の日本語訳に関する一考察
― 語彙とフレーズを中心に ―

孫遜・梁真恵

1. はじめに

キルギスの長篇叙事詩『マナス』は、9世紀から10世紀頃にかけて成立し、誕生以来、今日まで語り継がれてきた。少数民族の文化や言語の調査にともない、キルギス族の語り手ジュスプ・ママイ（居素普・瑪瑪依）の語った資料を元に、1984年から1995年にかけて、新疆人民出版社より8部18巻（約23万行）にわたる大規模なテキスト、キルギス語版『マナス』が出版された。さらに、ジュスプ・ママイ（居素普・瑪瑪依）が語った資料は、『マナス』漢訳委員会により漢訳され、2013年12月に新疆人民出版社より出版された。また、『マナス』も世界数ヶ国に翻訳、出版された。『マナス』の学術上の価値について、胡振華氏（1983：34）は「『瑪納斯』不只是一部珍貴的文学遺産、而且也是研究柯族的語言、歴史、民俗、宗教、音楽等方面的一部百科全書、它具有重要的学術価値。（『マナス』は貴重な文学遺産であるだけではなく、キルギス族の言語、歴史、民俗、宗教、音楽などを研究する百科全書でもあり、重要な学術的価値がある）」と指摘している。日本においても1984年より『マナス』に関する翻訳、および研究が開始されたが、『マナス』の日本語訳を対象とした研究はほぼ見られない。本稿は、『マナス』第一部と日本語訳「中国少数民族文学」「マナス」第一部第一分冊における中日の語彙、およびフレーズなどを比較して考察するものである①。

2. 語彙の日本語訳

これまで、翻訳について、世界各国で多くの研究が行われてきた。翻訳は異文化を理解する重要な手段の一つであるとしばしばいわれる。翻訳という作業においては、原文と訳文の内容が等価になっているのかということが常に意識されなければならない。等価が実現されない場合、読者に内容が正確に伝達されないという事例が議論されている。翻訳における等価については、成瀬武史（1996：2）によって「翻訳において原文の内容と訳文の内容の等価の実現をめざすだけでは不十分である。つねにめざすべきは、そして最終的にものをいうのは原文読者がその原文か

ら受け取る理解内容と訳文の読者がその訳文から受け取る理解内容の等価である」と指摘されている。ここで『マナス』における語彙の日本語訳の一例をみよう。

中国語訳
人们播种耕耘，丰收在望，
用少量的劳动能换来丰收，
地窖、仓库储满米粮。
浪迹四方的游子，
留恋这美丽的地方。　（p. 11）
日本語訳
人々は種を蒔き耕して豊作を望み
少しばかりの労働で豊作となり
かまどや倉庫には米が満ちている
四方をさすらう旅人は
この美しいところを懐かしむ　（p. 5上段、下線は筆者）

上記の中国語の「地窖」を日本語の「かまど」と訳すと、食糧の貯蔵場所という意味が消える。本来、地中に掘って物を蓄える場所である「穴蔵」が中国語の「地窖」が表わす意味と一致する。『漢語大詞典』では、「地窖」という言葉は、「保蔵物品或住人的地洞或地下室（品物を貯蔵する、あるいは人が住んでいる穴蔵、あるいは地下室）」と定義されている。6世紀前半、賈思勰の著した『斉民要術』には「地窖」という言葉が見られる。たとえば、

地窖着酒、令酒土気、唯連簷草屋中居之為佳。
（穴蔵（つちぐら）に酒をおくのは、酒に土気がつく、ただ簷（のき）つきの草屋の中にこれを据えるのが佳いとされる②。）
（熊代幸雄、西山武一訳）

と記載がある。

「地窖」という語は『隋書』において次のように用いられている。

又江南土薄、舎多竹茅、所有儲積、皆非地窖。
（又江南は土が薄く、竹で建てた家屋が多く、食物は地窖に貯蔵しない）
（巻四十一）

上記の「地窖」は、貯蔵室あるいは穴蔵という意味ではないかと考えられる。

また、中国語の資料においても「地窖」という語は、数多く記載されている。宋の時代、趙汝適（1225）の著した『諸番志』は上下二巻からなっており、上巻は外国の地理と風俗、下巻は外国の物産資源などが記載され、宋の時代における中国と海外との交流を研究する重要な文献であるといわれる。その「木蘭皮国」の一節に「地窖」という言葉が見られる。たとえば、

> 米麦開地窖、数十年不壊。
> （米と麦を穴蔵に入れたら、数十年腐らない。）

と書かれている。ここの「地窖」は、米と麦を貯蔵する穴蔵であろう。

食糧の保存については、1735 年頃、陳元龍の著した『格致鏡原』（後に『四庫全書』に収録）にも記載がある。たとえば、

> （略）三晋富家、蔵粟数百万石、皆窖而封之、有蔵十数年不腐者。……地窖燕都秦晋倶有之。
> （三晋の富家が数百万石の粟を穴蔵に全て込め封じ、十数年経っても腐らないものもある。（略）燕都秦晋にも地窖がある。）

「三晋」は山西省の別称である。その地方の富家が百万石の粟を地窖に封じ、中には十数年も腐らずにあるものもある。

日本語では、「穴蔵」が「貯蔵室」として使用される例が見られる。たとえば、1833 年に発表された森鴎外翻訳の『ファウスト』第二部において、

> これまでは出所（でどころ）の好（よ）い、時代のあるのが、樽を並べて積み上げて、穴蔵にありましたのに……
>
> （4860）

> 商人は反物を切っている。為立屋（したてや）は縫っている。「帝王万歳」を唱えては、どこの穴蔵も景気好く……
>
> （6095）

> あの神様の夢見心の微酔（ほろよい）に、いつでもいるだけの酒は、遠い世の後まで、冷たい穴蔵の右左に並べてある。
>
> （10020）

と書かれている。

また、1917 年、菊池寛の著した『ゼラール中尉』には

（略）「さう云ふ事を云ふ君は、葡萄酒（ぶだうしゅ）の真の理解者ではないね、この葡萄酒は穴蔵の中に千年蔵ひ込んであったボルドーにだって負けることではないよ。いったいベルギーの地質がだね……」と云ひながら……

と書かれている。

以上から、中日両言語の用例における「地窖」と「穴蔵」は、どちらも「貯蔵の倉」という意味であると考えられる。「地窖」を「かまど」と訳すと、中日両言語の語彙は等価にならない。

次に「米糧」という言葉の訳文を見てみよう。上記の中国語訳と日本語訳を再び引用する。

中国語訳
地窖、仓库储满米粮。（p. 11）
日本語訳
かまどや倉庫には米が満ちている（p. 5上段、下線は筆者）

中国語の資料においては「米糧」が例として多く見られる。その一部を次に示す。

其国中大家不佃作、坐食者万余口、下戸遠担米糧魚塩供給之。
（その国中の大家は佃作せず、坐食する者は一万余口、下戸は遠く食糧魚塩を担ぎこれに供給する。）
（『三国志』，巻三十）

僧辯悉上江渚米糧、並沈公私船於水。
（僧辯は川辺の米糧をすべて陸揚げし、公私の船を水に沈める。）
（『梁書』，巻四十五）

開禧二年正月、発米糧給貧民。
（開禧二年正月に食糧を貧民に発する。）
（『隋書』巻四十一）

再給軍士雪寒銭、発米糧給貧民。
（再び軍士に雪寒の銭を賜わり、貧民に米糧を支給する。）
（『宋史』巻三十八）

賜各部官僚以下日給米糧分例（略）亦給人三口米糧，銭一百文。
（慣例に従い各部の官僚以下に一日ごとに食糧を賜わる。……亦一人に三人分の米糧、銭一百文を賜わる。）
（『金史』巻五十八）

自今悉折輸米糧、貯於便近地、以給襄陽軍食。
（税のかわりに食糧を納入させ、それを襄陽の軍の食糧として近くの地に貯蔵する）
（『元史』巻七）

工程浩大、米糧数多。
（工事は浩大で食糧の数も多い。）
（『元史』巻六十五）

『西域行程記』における「別失八里」の一節に次のような内容がある。

飲食唯肉酪、間食米麺。
（飲食は肉と酪だけ、間食にはしばしば米と麦を食べる。）
（『西域行程記西域番国志咸賓録』「別失八里」）

『漢語大詞典』では、「米糧」は「糧食」であると解釈されている。「糧食」は食用とする物、食物。つまり、米、麦などの主食物であるとされている。

現在、中国語と日本語の「米」とは、稲の種子からもみ殻を取り去ったものを示し、「麦」の意味は含まれていない。

キルギス族は遊牧民族で、大部分がイスラム教を信仰し、コーランに示された規律にしたがって日常生活を行っている。小麦粉を主食とし、羊肉や牛肉や野菜を食す。羅会光（2008：14－17）によれば、小麦粉料理のほうが米料理より多いということである。上記の中国語訳における「米糧」の例から、「米」に限らず、「麦」などの意味も含まれていることがわかる。もし「米糧」が「米」の意味のみ指すのであれば、「麦」を指す「麦糧」という言葉があるはずだが、実際には「麦糧」は『漢語大詞典』、『漢語大字典』、『現代漢語字典』、『大漢和辞典』などの辞書に記載がなく、現代中国語には存在していないと考えられる。

次に『マナス』における一節「アローケがキルギスを侵犯すること」の訳文をみよう。

中国語訳
他用駿馬和錦袍賄賂卡勒瑪克人,
假装与他們和睦相処。
財富如蜜餞能打動人心,
貧窮能讓英雄低下頭顱。
聚斂財富，財大気粗,
才会讓人挺起胸脯。 (p. 34)
日本語訳

彼は駿馬と錦の着物でカルマック人にわいろを贈り
かれらと仲よく住むようなふりをした
財産は蜜のように人の心を動かし
貧困は英雄の頭を下げさせることができる
財産を集め、おうようにふるまい
ようやく人は胸を張ることができる　(p. 22)

中国新疆ウイグル自治区は果物の王国と称され、地域によって哈密（ハミ）のハミ瓜と棗、吐魯番（トルファン）のぶどう、庫爾勒（コルラ）の梨、阿克蘇（アクス）と伊犁（イリ）のスイカ、りんご、栗、沙果、杏、桃、胡桃、阿図什（アトシュ）のいちじく、喀什（カシュガル）と葉城（カルギリク）の石榴などの果実が生産されている。その地方には、漢族、カザフ族、モンゴル族などのほか、キルギス族も居住している。キルギス族は、他の少数民族と同じように、新鮮な果物を蜜あるいは砂糖に漬けて保存する習慣があると考えられる。

「蜜餞」という語の出所を確認すると、中国語の資料には次のように記されている。

恩賜月餅、奶酥餅、蜜餞、荔枝果品各件。
（月餅、奶酥餅、蜜餞、荔枝という食べ物と果物を若干賜った。）
（世宗憲皇帝硃批諭旨，巻五十）

人亦采嫩実、蜜餞為果食、呼之天茄。
（人はまた若実をとり、蜜餞にして食べ、これを天茄と呼ぶ。）
（陝西通志，巻四十三）

肉甘酸、宜蜜餞、鏤為細辦。
（肉は甘くて酸っぱい、蜜餞に宜しく、細かく花の模様に刻む。）
（嶺外代答，巻八）

紫菜、紫粉、蜜餞、山裏紅、蒲黄、毎斤二錢。
（海苔、紫粉、蜜餞、山査子、蒲黄は一斤二銭である。）
（欽定大清会典則例，巻一百五十四）

蜜餞、桜桃等物一、七十罈
（蜜餞、サクランボ等物一、七十つぼ。）
（欽定続文献通考，巻二十九）

攪瓜、形類倭瓜、而小、内生筋絲、醬醃、蜜餞皆宜食。

（攪瓜の形は南瓜と似ており、小さい。中から糸筋が生え、味噌漬けにしても、蜜餞にしても食べるに宜しい。）

（皇朝通志，巻一百二十五）

蜜餞、果品、幷榛子、松子諸珍物。
（蜜餞、果物、そしてハシバミ、松の実の諸珍物。）

（万寿盛典初集，巻五十二）

独此瓜耐久、經霜乃熟、藏可彌年不壞、今人亦用為蜜餞。
（ただこの瓜は長持ちで、霜を経て熟し、貯蔵しても長年腐らない。今人はまた、蜜餞に用いる。）

（農政全書，巻二十七）

賜佩文韻府一部共二十套、淵鑑類函一部、共二十套、上等土木人參一斤、高麗人參一斤、蜜餞山査一瓶、関東白蜜一斤、蜜餞郁李一瓶、蜜餞北花紅一瓶、製黄瓜糖果一瓶、蜜餞熱河梨一瓶、蜜山査末一瓶、乾香瓜片一瓶、蜜餞圖衣克特一瓶、蜜餞山杜一瓶。
（佩文韻府は一部全部で二十帙、淵鑑類函は一部全部で二十帙、上等土木人參は一斤、高麗人參は一斤、蜜餞山査は一瓶、関東白蜜は一斤、蜜餞郁李は一瓶、蜜餞北花紅は一瓶、糖果入りの胡瓜は一瓶、蜜餞熱河の梨は一瓶、蜜漬けの砕けた山査は一瓶、干しマクワウリは一瓶、蜜餞圖衣克特は一瓶、蜜餞山杜は一瓶を賜う。）

（西陂類稿，巻二十五）

新鮮な果物を蜜あるいは砂糖に漬けるのは、保存の手段の一つであるだけではなく、果物を再加工することにより付加価値を生むためであろう。

日本には中国の「蜜餞」と同様のものがあるのか。日本の史料を引用すると、次の通りである。

佛手柑〔和名〕マルブシュカン
〔学名〕Citrus medica L.
〔和名〕テブシュカン
〔学名〕C.medica L.var.chiarocarpus Lour

枸櫞ト云又香櫞ト云如二人指一ナルヲ佛手柑ト云由(ヨシ)郡志ニノセタリ昔本邦二無レ之近世来(ル)味ハ不レ堪レ為レ果只蜜煎豉(ミソツケ)淹トス香味ヨシ其木寒ヲ畏(ル)南方煖ニ宜シ故ニ北土ニハウヘテモ不レ茂(ラ)本草ニ置二衣笥(ノニ)中一則数日香(カ)不レ歇(ヤマ)トイヘリ今試ニ然リ

（大和本草，巻之十，木之上）

また『和漢三才図会』には、「蜜煎」という語が見られる。次の一部は『本草綱目』から訳されたものであると知られる[3]。たとえば、

> 仏手柑　枸櫞　香櫞〔(和名は) 不由之加牟〕『本草綱目*』(果部山果　　類枸櫞〔集解〕)に次のようにいう。仏手柑（ミカン科）の樹は朱欒に似ていて、葉は尖って長く、枝間に挿がある。これを水に近いところに植えると生育する。その実の状は指のついた人の手のようで、長さは一尺四、五寸のものがある。皮は橙・柚に似ていて、厚く皺んで光沢がある。色は瓜に似て、生のは緑、熟すると黄色になる。肉は大へん厚く白く蘿蔔のようで、さくさく虚である。核は細かくて味はそれほどよくはない。しかし清香が漂い、衣笥の中に入れると、数日経っても香りは消えない。もし芋の切片を蒂のところに置き、湿紙で囲み保護すると、いつまでもしなびない。あるいは蒜（葷草類）を擣いてそれで蒂の上を覆うと、香はさらに充溢する。
> またその汁で葛紵を洗うと、酸漿で洗うよりも勝れている。閩・広（福建・広東・広西）の地方に多く産し、そこでは花鳥をこれに彫刻し、蜜煎果として食べる。またこれを机の上に置き賞玩に供してもよい。北方の人にこれを与えると大へん尊重する。
>
> （和漢三才図会，巻八十七）

中国語の「蜜煎」あるいは「蜜餞」という語は、日本語では使用されない。中国語と同じ意味を表す日本語に、「砂糖漬」と「蜜漬」がある[4]。上記の日本史料における「蜜煎」という言葉は、明らかに中国語からの借用であると考えられる。中国語において「蜜煎」とは「蜜餞」であり、同じ意味として使用される[5]。

前述したように、中国語の「蜜餞」は蜜で加工した食品である。「蜜餞」は、キルギス族の人々の日常生活にかかわるものであるだけに間違いはなかろう。中国語訳における「蜜餞」を「蜜」と翻訳すると、キルギス族の日常生活が十分に反映されない。

中国語と日本語には数多くの同形語が存在する。中国語訳の「事情」は日本語訳の「事情」と同じ意味を表すのか。確認のため、まず中国語訳と日本語訳を次に示す。

> 中国語訳
> 剛才那个小孩説的事情,
> 連阿徳勒別克老人也会賛同。　　(p. 48)
> 日本語訳
> 今しがたあの子が言った事情は
> アディルベク老人さえも賛成せず　　(p. 34 下段)

中国語では「事情」という語は、どのような意味を表すのか。中国語史料の『隋書』と『宋史』、

そして「愛漢語」というコーパスから「事情」の用例を引用すると、次の通りである[6]。

口對百餘人、皆盡事情、同輩莫不歎服。
（百余人について口頭でこたえたが、皆（囚人の）犯罪の内容を知り尽くしたものだったので、同輩は皆感服した。）

『隋書』（巻六十六）

今辺臣不燭事情，精米、青稞與糙米、大麦一例抵斗給散……
（今辺疆を守る大臣が事情を知らず、一率に精米と青稞と糙米と大麦を分量通りに支給した。）

『宋史』（巻一七五）

上記の「事情」の用例は、『漢語大辞典』（第１巻）では「事実の真相；実情，事理、人情」と定義されている。しかし、社会の発展にともなって、「事情」の本来の意味が変化した。現代中国語における「事情」の用例は、次のようなものである。

我有一些事情想請你幇忙，不知行不行？
（お願いしたいことがありますが、宜しいでしょうか。）

鄧毅富（1991）『来自戒毒所的報告』黄金時代雑誌社

我在這里講一件発生在一九五四年第一次日内瓦会議上的事情。
（私はここで 1954 年のジュネーヴ第一回会議のことをお話したいです。）

王炳南（1979）『回憶周総理在外交工作中几个片断』世界知識出版社

好吧，我試試看，有事情再告訴你好了。
（やってみます。また何かあったら、ご連絡します。）

陳瘦竹（1935）『職業』商務印書館

這些事情，并不是非常奇怪的。
（これらのことがおかしいわけではない。）

秦牧（1984）『青春生活的主旋律』中国青年出版社

雖然是二十年前的事情，但留在我脳中的印象仍很鮮明。
（二十年前のことは、今になっても鮮明な印象として頭に残っている。）

夏鼐（1954）『追悼考古学家梁思永先生』光明日報社

這簡直是一件難以置信的事情。
（これはほんとうに信じられないことである。）

相峰（1983）『探索号』江蘇人民出版社

我不干這種無聊的事情。
（このようなつまらないことをしない。）

鄭文光（1981）『泅渡東海』海洋出版社

事情都過去了，還追求它干什么？
（これまでのことは水に流しましょう。）

彭栄生（1990）『正是為了愛』黄金時代出版社

上記の「事情」の意味について、『講談社中日辞典』では「事．出来事，仕事．職業，事故．過ち」と定義され、『中国語大辞典』では、「①用事．仕事．②事．事柄．③事件」と定義されている⑦。

日本語における「事情」という語の出所は、『日本語国語大辞典第二版』（6巻）で確認できる。掲げられている「事情」の用例を見ると、中国語より伝えられたものであると考えられる。たとえば、康保三年（966）の石山寺所蔵虚空蔵念誦次裏文書と延慶平家（1309-10）一本・白山衆徒山門へ送牒事の二例のみであったが、意味の面からみれば、中国語と合致しているのではないかと思われる。明治に入ってから、中国語の旧来の意味で、広く使用されるようになった。その用例を次に示す。

けだしその変革するや、まことに時世の然（しか）らざるを得ず、事情の止むを得ざるに出（いづ）れば、すなわち国に利あり、民に益あり、（略）

津田真道『政論二』

その物を欧州に輸入（ママ）して大利を得たりとの事あり。その事情はこのたびの事に異なれども、他国の事変によりて利を得るの趣意はほぼあい似たり。

福沢諭吉『靖台和議の演説』

（略）わが人民に智力あらざれば、これを如何（いかん）ともす可らず。その如何ともす可らざるの事情をそのままにして……

福沢諭吉『内地旅行西先生の説を駁す』

（略）一切これに委任し、ともに会同して彼（かの）学士をしてわが国内の事情を熟察せしめ、

正大公明の議を興し、その利害得失を審(つまびら)かにし、その可否を決し、もって我国貿易の改正をあまねく海外に布く可とす。

杉亨二『貿易改正論』

ゆえに今日にあたり朝鮮等の事を論ずるも、内外事情を斟酌(しんしゃく)し、断ずるに万国に貫通するの公道を以てするのみ。

坂谷素『尊王攘夷説』

ただ前後の事情により、大体の推測は下せぬこともない。

芥川龍之介『馬の脚』

彼はそこに立ったまま、こんな結果になった前後の事情を想像しながら遠ざかってゆく靴音を聞き送っていた。　その晩父は、東京を発った時以来何処に忘れて来たかと思うような笑い顔を取りもどして晩酌を傾けた。

有島武朗『親子』

自分の脳神経の不健康を患うて鼻の療治をし、夫婦関係が無意義であると言いながら家庭の事情を緩和すべき或る努力をし、そしてその……

石川啄木『性急な思想』

僕も吉弥に引ッ込まれたことがあって、よく知っているから、そこへ行っている事情は十分察しられるので、いいことを聴かしてくれたと思った。

岩野泡鳴『耽溺』

この交渉は相互の事情でそれぎりとなったが、緑雨と私との関係はそれが縁となって一時はかなり深く交際した。

内田魯庵『斎藤緑雨』

鸚鵡の一件で木村は初めてにがにがしい事情を知って、私に、それとなく、言葉少なに転宿をすすめ、私も同意して、二人で他の下宿に移りました。

国木田独歩『あの時分』

「くそッ！　おれらをダシに使って記事を書こうとしてやがんだ！　俺れらを特種にするよりゃ、さきに、内地の事情を知らすがいゝ。」……

黒島伝治『前哨』

これらの事情の湊合のために、源三は自分の唯一の良案と信じている「甲府へ出て奉公住みする」という事をあえてしにくいので……

幸田露伴『雁坂越』

それに国との手紙の往復にも多くの日数がかかり世界大戦争の始まってからはことに事情も通じがたいもどかしさに加えて、三年の月日の間には国のほうで起こった不慮な出来事とか種々の故障とかがいっそう旅を困難にした。

島崎藤村『分配』

先方の事情にすぐ安値な同情を寄せて、気の毒だ、かわいそうだと思う。それが動機で普通道徳の道を歩んでいる場合も多い。

島村抱月『序に代えて人生観上の自然主義を論ず』

私がそのひとのお母さんを知っていて、そうしてそのお母さんは、或る事情で、その娘さんとわかれわかれになって、いまは東北のほうで暮しているのである。

太宰治『朝』

若(も)し事情が許せば、静かなこの町で隠逸な余生を楽しむ場合、陽気でも陰気でもなく、意気でも野暮でもなく、なおまた、若くもなく老けてもいない……

徳田秋声『挿話』

その原因事情はいずれにもせよ、大審院の判決通り真に大逆の企があったとすれば、僕ははなはだ残念に思うものである。

徳冨蘆花『謀叛論（草稿）』

当節の文学雑誌の紙質の粗悪に植字の誤り多く、体裁の卑俗な事も、単に経済的事情のためとのみはいわれまい……

永井荷風『妾宅』

また階級もなくなる交通も便利になる、こういう色々な事情からついに今日の如き思想に変化して来たのであります。

夏目漱石『教育と文芸』

其両親に遠ざかるは即ち之に離れざるの法にして、我輩の飽くまでも賛成する所なれども、或は家の貧富その他の事情に由て別居すること能わざる場合もある可きなれば……

福沢諭吉『女大学評論』

即ち私の心的要素(マインドスタッフ)を種々の事情の下に置いて、揉み散らし、苦め散らし、散々な実験(エクスペリメント)を加えてやろう。そしたら、学術的に心持(メンタルトーン)を培養する学理は解らんでも、その技術(アート)を獲ることは出来やせんか、と云うので……

二葉亭四迷『予が半生の懺悔』

(略) そは現在と一様なる事情の過去または未来に継続するに過ぎず。ここに例外とすべき蕪村の句二首あり。

正岡子規『俳人蕪村』

夕方父が帰って炉ばたに居たからぼくは思い切って父にもう一度学校の事情を云った。

宮沢賢治『或る農学生の日誌』

人間らしくないすべての事情、人間らしくないすべての理窟とすべての欺瞞を憎みます。愛という感情が真実わたしたちの心に働いているとき、どうして漫画のように肥った両手をあわせて膝をつき、存在しもしない何かに向って上眼をつかっていられましょう。

宮本百合子『愛』

木村は新聞社の事情には疎いが、新聞社の芸術上の意見が三面にまで行き渡っていないのを怪みはしない。

森鴎外『あそび』

「事情」という語は、論説や文学作品で使用されるだけではなく、法律や公文書などにおいても使用される。

第26条①執行停止の決定が確定した後に、その理由が消滅し、その他事情が変更したときは、裁判所は、相手方の申立てにより、決定をもって、執行停止の決定を取り消すことができる。

『行政事件訴訟法』

不動産の現実の価格は、取引などの必要に応じて個別的に形成されるのが通常であり、しかもそれは個別的な事情に左右されがちのものであって、不動産はその取引市場をもつことが困難であり……

『不動産鑑定評価基準の設定に関する答申』

上記の「事情」の意味については、『日本語大辞典第二版』(第6巻)、および講談社カラー版『日

本語大辞典第二版』によれば、それぞれ「物事が、今どうなっているか、また、どう変わってきたかというような細かい状態や理由。ことのありさま。ことの次第」と「物事がそうなった理由・原因・来歴などについてのこまかい状態。また、現在の状態。事のわけ・次第。Matter;circumstances」と解釈されている。このような意味は、いずれも中国語における「事情」の古い意味と合致するものであろう。

日本に伝えられた漢語、とくに二文字の語には、時代が下がるにつれて、意味の拡大や縮小がしばしば見られる。今日に至っても、中国語と日本語には同形語が数多く存在しているのは事実である。中日両言語には、同形同義語、同形類義語、同形異義語が存在するため、翻訳の際に、語句の意味を詳細に確認しなければ、原文のニュアンスが反映されない可能性もある。上記の日本語訳における「事情」は明らかな誤りであろう。

中国語訳
難聴話也伝入了瑪納斯的耳中,
瑪納斯為此十分煩悩、傷心。 (p. 77)
日本語訳
聞きにくいうわさがマナスの耳に伝わり
マナスはこのためにひどく悩み悲しんだ (p. 61 上段)

『中国語大辞典』では、「難聴」は「(ことばが) 聞き苦しい」と解釈されている。『日本語学習使い分辞典』の説明を引用すると、次の通りである[8]。

●「にくい」何かの原因や理由により、ものごとを快適に行えない。普通よりも大変だということです (例 1, 2, 3, 4, 5)。その原因や理由は、多くの場合、「かかとが高すぎる・ペン先が悪い・苦しい……」など外的状況です。
●「づらい」ものごとを行うのが大変だ・困難だということです (例 6, 7, 8, 9, 10)。「〜にくい」よりも困難な度合いが強く感じられ、肉体的・精神的苦痛を表します。

困難を表わす最も一般的な表現は「〜にくい」であるのに対して、「〜つらい」は、動作主がそれをすることによって、精神的または肉体的に「つらい」と感じることを表す。マナスは「聞き辛いうわさ」が耳に伝わったため、ひどく悩み悲しむことになったのであり、これは精神的な苦痛を感じることを表しているのであろう。同様に、「聞き苦しいうわさ」あるいは「嫌なうわさ」という表現を用いるならば、マナスが精神的または肉体的に「つらい」と感じたことを表現できるであろう。

これまで見てきたように、翻訳作業においては常に原文と訳文における語彙の「等価」が要求される。

3. フレーズと人名の日本語訳

訳文は、言語表現として文脈の中で再生されなければ、原文の意味を訳文にうまく伝えることができないといわれる。また翻訳受容者の異文化に対する理解について、滝川桂子（1995：149）による「一方、原語を知らない翻訳受容者は翻訳語によってしか異文化の情報を得られないことから、翻訳による情報は極めて正確さを要求される。」という指摘がある。訳文に誤訳あるいは不適訳があれば、原文の意味が訳文で伝わらないこともあるのではないか。次のような日本語訳では、中国語訳の意味は十分に表現されない。

中国語訳
在汗王瑪瑪依で時代,
在汹湧的葉尼塞河畔,
我們組成了四十个部落的連盟。 (p. 13)
日本語訳
「汗王ママイの時代に
激しく流れるエセニイ川の畔に
我らは四十の部落を結成した。 (p. 7 上段)

上記の中国語訳「連盟」という言葉は「四十の部落の」という修飾を受け、共同の目的のために互いに盟約を結ぶという組織体になったというが、「我らは四十の部落を形成した」と訳すと、形成したのは「連盟」ではなく、「四十の部落」ということになる。これでは四十の部落が互いに誓いを結んだという意味が反映されない。

また、日本語訳に中国語テキストの情報が正確に反映されない場合、意味上の差異が生じてしまう。

中国語訳
治理葉尼塞百姓的,
是卡勒瑪瑪依汗王。
当他当上了汗王,
“卡勒瑪瑪依”的真名被人遺忘,
“汗王瑪瑪依”的英名響徹四方。 (p. 11)
日本語訳
エニセイの人々を治めるのは
カルママイ汗王
彼が汗王になると

「カルママイ」の名は人々に忘れられ
「汗王ママイ」の英名が四方に響きわたった　（p. 5）

中国語訳にある「真名」は「元の名」と「本名」という意味が強調されているが、日本語訳では「名」のみとなっており、「元の名」や「本名」という意味は含まれていないと思われる。

また、次の中国語訳と日本語訳では、以下のようになっている。

中国語訳
幸好娶了她啊,
那女人為他生下一个児男。
他給児子取名叫波多諾,
児子長得天庭飽満十分可愛。
波多諾長到九歳時,
便顕示出青鬃狼的神情,
体格高大又很強健。　（p. 12）
日本語訳
子どもはとても可愛く育った
ボタノが九歳になった時
青いたてがみの狼のようすを表す
体つきは大きくたいそうたくましかった　（p. 6 上段）

上記の中日訳を比較すると、中国語訳にある「幸好娶了她啊，那女人為他生下一个児男（運よく、彼女を嫁にもらって、その女の人が彼のために男の子を生んでくれた）」という内容が訳されていない。また誰が息子に「ボタノ」という名前を付けたのかという情報が日本語訳で伝えられていない。次の例でも、同様に中国語文の情報が日本語訳に反映されていない。たとえば

中国語訳
翌日，她清晨起床,
沐浴浄身在塋澈的清泉。
“加克普会不会来臨！”
她心神不定，左顧右盼。
長長的秀髪披在肩上,
無子的痛苦縈繞在心間。
可憐的女人正焦急地等待,
加克普正好及時赶到泉辺。　（p. 42）

日本語訳
あくる日、朝に彼女が起きると
清く澄んだ泉で全身を沐浴した
「ジャケップがやって来るかもしれない」
彼女は落ち着かず、左右を見まわした
緑の黒髪は肩にかかり
子のない苦痛が胸の中にまとわりついた　（p. 29）

中日訳を比較すれば明らかではあるが、中国語訳の最後の二行が日本語で訳されていないため、「彼女が泉のほとりで待ちかねていると、ちょうど加克普（ジャケップ）が急いで泉のほとりに駆けつけた」という、新婚の二人が泉のほとりで顔を合わせるという内容が読者に伝達されない。

また、日本語訳が中国語訳と正反対の意味になっている例も見られる。

中国語訳
“你説的事情其実不難,
就像鷹抓兔子略費周折。”　（p. 60）
日本語訳
「鷹が兎を捕えるのが簡単なように
あんたのいうことは難しくない」　（p. 45）

中国語の「略費周折」というフレーズを分解すると、「略＋費＋周折」になる。日本語に訳すと、「少し＋（金銭・材料・時間・労力・精神などを）費やす，使う＋紆余曲折，手数」であり、鷹は少し苦労をして、兎を捕まえることができるという意味となる。日本語訳では、鷹は少しも苦労をせず、容易く兎を捕まえるという意味になっている。さらに同様の誤訳がある。再び、上記の中国語訳と日本語訳を引用すると、次の通りである。

中国語訳
剛才那个小孩説的事情,
連阿徳勒別克老人也会賛同。　（p. 48）
日本語訳
今しがたあの子が言った事情は
アディルベク老人さえも賛成せず　（p. 34 下段）

中国語訳の「賛同」という動詞を、日本語の「賛成せず」と訳すのは、明らかな誤訳である。中国語訳の「賛成」の前に否定を表す「不」という言葉がないからである。

欧米あるいは中国の少数民族の人物の名前を中国語に翻訳する場合、通常は音訳が用いられる。たとえば、「ドゥ」の発音は「徳」と音訳される。「ディ」は一般的に「迪」と音訳される。このような人名の翻訳は、原則として音訳の慣例にしたがって行わなければならない。しかしながら、人名の翻訳として誤っている例がある。

中国語訳
他們与諾依古特的卡勒瑪克人,
草原相連，便被迫為隣,
巴勒塔的英名逐漸被人遺忘,
人們称他為“諾依古特人”。 (p. 32)
日本語訳
彼らとノゴイトのカルマック人は
草原がつながり、隣り合わせにさせられた
バルタの英名はしだいに忘れ去れ
人々は「ノイグート人」と呼び（27） (p. 20 下段)

中国語訳の「諾依古特」は、日本語訳では「ノゴイト」と「ノイグート」の二つの音訳がある。訳者は注 27 に「ノイグート人」と記されている。「ノゴイト」は恐らく音訳として誤りであろう。

キルギス族の人名の中国語の表記「卡特卡朗」は四音節であるが、日本語訳で「カトラン」と訳している。「カトカラン」とすれば、中国語の音節にも合い、発音のリズムも良くなるだろう。

翻訳という作業では、言語の面において、個々の語彙、フレーズや内容の全体を把握した上で行われてはじめて、等価を構築する行為になるといえよう。翻訳の困難について、西永良成（2000：63）は次のように指摘している。

「日本語でやたらに抽象名詞を主語にすると、あまりにも生硬な翻訳調になってしまいます。また関係代名詞とか、話体を文章体に組み入れてしまう自由間接話法といったように、そもそもそのままでは日本語にならない要素もあります。そのうえ、どんな言語にも文化的な背景があり、それを一語、一文で伝えることはきわめて難しいのです。」

とある。

4. おわりに

英雄叙事詩『マナス』の日本における翻訳は三十年前に始まる。以来、『マナス』に関する研

究論文も相次いで発表されてきた。とくに日本語を母語とする読者に『マナス』を深く理解してもらうために、『マナス』第一部第一分冊の日本語訳者として、中国語訳にある「注」を全部日本語に翻訳しただけではなく、また、「克塔依（キタイ）」や「克普恰克（キプチャク）」などのような中国語訳にない名詞も注の形で解説されている。文学作品の翻訳を振り返ってみれば、翻訳の「等価」について数多くの議論が行われてきた。松中完二（2003：93）は「一言語に存在する概念を、他言語のどのような言葉で表せば原語のそれと等価になりえるかということも重要な問題である」と指摘している。翻訳行為は異文化の伝達にかかわっており、元の言語に表れる風俗習慣を尊重しながら、そのまま目標言語の読者に伝えることを目指すものである。中日の言語の構造において相異があったとしても、元の言語の語彙やフレーズに対する認識、創作、拡張などによって正確な翻訳が可能になると考えられる。本稿では主に 2011 年月に出版された中国少数民族文学 4 キルギス族英雄叙事詩『マナス』第一部第一分冊を対象に、日本語訳における語彙とフレーズの一部について考察した。日本語訳『マナス』第一部第一分冊は、中国語訳『マナス』（第一部）の翻訳は三分の一の内容にとどまっている。日本語訳の早期完成が待たされるところである。

注

① 本稿が使用している中国語訳底本は 2009 年 1 月に人民出版社より出版された『マナス』第一部であり、全部で 19 節にわたる。日本語訳底本は 2011 年 3 月に「中国少数民族文学」刊行委員会より発行された中国少数民族文学 4「マナス」第一部第一分冊であり、日本語訳は完訳ではなく、中国語訳の 1 ～ 6 節までである。特に説明を加えない場合、中国語の例文の日本語訳はすべて筆者が訳したものである。

② 『斉民要術』における「穴蔵」は熊代幸雄、西山武一両氏より「つちぐら」のルビをつけられているが、『日本国語大辞典第二版』（第 9 巻）によって「地下に穴を掘ってつくった倉。あなぐら」と解釈されている。p. 349.

③ 『四庫全書』に収録されている『本草綱目』（巻三十）の一節を引用すると、次の通りである。

枸櫞音矩員宋圖經。校正原附荳蔻下，今分出。釋名香櫞一作圓。佛手柑時珍曰：義未詳，佛手，取象也。

集解　藏器曰：枸櫞生嶺南，柑、橘之屬也。其葉大其實大如盞，味辛酸。頌曰：今閩廣、江南皆有之，彼人呼為香櫞子形長如小瓜状，其皮若橙而光澤可愛，肉甚厚，白如蘿蔔而鬆虚。雖味短而香芬大勝，置衣笥中，則數日香不歇。寄至北方，人甚貴重。古作五和糝用之。時珍曰：枸櫞産閩廣間。木似朱欒而葉尖長，枝間有刺。植之近水乃生。其實狀如人手，有指，俗呼為佛手柑。有長一尺四、五寸者。皮如橙柚而厚，皺而光澤。其色如瓜，生緑熟黄。其核細。其味不甚佳，而清香襲人。南人雕鏤花鳥，作蜜煎果食，置之几案，可供玩賞。若安芋片於蒂，而以濕紙圍護，經久不癟，或擣蒜罨其蒂上，則香更充溢。異物志：云浸汁浣葛紵，勝似酸漿也。

④ 『日本国語大辞典第二版』（第 6 巻，p. 128）によれば

(1)「砂糖漬」は果物などを砂糖に漬けること。果物や野菜などを軟らかく煮たり、砂糖煮してから乾燥し、砂糖の中に漬けること。また、そのもの。

(2)『日本国語大辞典第二版』（第 12 巻，p. 755）では「蜜漬」蜜に漬けること。また、その漬けた食品。

⑤ 『漢語大詞典』（第 8 巻，p. 923）によれば「蜜煎」はすなわち「蜜餞」であると解釈されている。

⑥ 例文は http://www.aihanyu.org/cncorpus/cncindex.aspx からの引用。

⑦　中国語の「事情」については、『中日大辞典』（大修館）、『中日辞典第２版』（小学館）、『東方中国語辞典』（東方書店）、『基礎中国語辞典』（日本放送出版協会）などの日本の辞典では、「事．事柄．仕事．職業．職務．用．用事．事故．間違い」と解釈されている。

⑧　『日本語学習使い分け辞典』における例は次の通りである。

1）このペン先は書きにくい。
2）苦い薬は飲みにくい。
3）席が舞台のななめ前だったので、劇がとても見にくかった。
4）この靴は、かかとが高すぎて歩きにくい。
5）ちょっといいにくいのですが、先日貸したお金を返していただけませんか。
6）最近歯が悪くなったので、かたいものは、食べづらい。
7）雨で手紙の文字がにじんで読みづらい。
8）高いビルのたっている地域では、電波がじゃまされて、テレビが見づらくなることがあります。
9）新しい靴をはいたら、足にまめができて歩きづらい。
10）親が失敗したなんて、子供には話しづらい。

引用に当たって、当該辞典にあるルビおよび英語の訳文は省略した。例文の下線は筆者によるものである。

引用・参考文献

日本語
愛知大学中日大辞典編纂所（2010）『中日大辞典』（第三版）大修館，pp．1560 － 1561.
相原茂（2010）『講談社中日辞典』（第三版）講談社，p．1458.
相原茂，荒川清秀，大川完三郎（2004）『東方中国語辞典』東方書店，p．1187.
芥川龍之介（1991）『或日大石内蔵之助桂野抄他十二篇』岩波書店，p．271.
有島生馬，里見弴（1929）『有島武朗全集』（第三巻）新潮社，p．429.
石川啄木（1977）『石川啄木全集』（明治文学全集 52）筑摩書房，p．255.
石川松太郎（1977）『女大学集』（東洋文庫 302）平凡社，p．221.
岩野泡鳴（1992）『耽溺』岩波書店，p．23.
乾尋（1982）「『マナス』叙事詩―キルギス族民間文学の紹介―」『口承文芸研究』pp．23 － 25.
上野恵司（2002）『基礎中国語』日本放送出版協会，p．596.
内田魯庵（1985）『内田魯庵全集』（第四巻）ゆまに書房，p．173.
エリノア・ラチモア著；神近市子訳（1942）『新疆紀行』生活社.
菊池寛，廣津和（1977）『菊池寛廣津和集』筑摩現代文学大系 27、筑摩書房，p．23.
編集兼発行人木村覚（1969）『不動産鑑定評価基準－関係法令・旧基準収録』日本不動産研究所，p．68.
国木田独歩（1956）『国木田独歩集』（現代日本文学全集 57）筑摩書房，p．210.
黒島伝治（2001）『前哨』（定本黒島伝治全集五巻第三巻小説Ⅲ）勉誠社，p．347.
幸田露伴（1927）『幸田露伴集』（現代日本文学全集第８編）改造社，p．269.
権藤与同夫（1991）『ウイグルその人々と文化』朝日新聞社.
柴田武等編（2008）『講談社類語辞典』講談社，p．127，p．179，p．195，p．327，
島崎藤村（1956）『島崎藤村全集 21』筑摩書房，p．119.
訳注者島田男雄，竹島淳夫，樋口元巳（1990）『和漢三才図会』（全 18 巻）平凡社，pp．368 － 369.
島村抱月（1920）『抱月全集』（第二巻）天佑社，p．169.
校注白井光太郎（1932）東洋医薬叢刊之内『考注大和本草』（第一冊）春陽堂，pp．404 － 405
編集代表菅野和夫等（2006）『六法全書』Ⅰ有斐閣，p．710.
翻訳者鈴木眞海（1933）『頭注国訳本草綱目』（第８冊菜・果部）春陽堂，pp．389 － 390.
大東文化大学中国語大辞典編纂室（1994）『中国語大辞典』（全一巻二冊）角川書店，p．2800.
滝川桂子（1995）「原語の背景―翻訳における違和感―」『名古屋文理短期大学紀要』第 20 号，pp．143

－ 151.
太宰治（1958）『太宰治全集』（第 9 巻）筑摩書房，p. 191.
田中魁等編（1998）『類語使い分け辞典』研究社，pp. 1-2，p. 102，p. 307.
徳田秋声（1957）『徳田秋声集（二）』（現代日本文学全集 63）筑摩書房，p. 319.
中野好夫（1979）『謀叛論（草稿）』岩波書店，p. 14.
夏目漱石（1980）『漱石全集』（第三十三巻）岩波書店，pp. 95 － 96.
成瀬武史（1996）『英日日英翻訳入門』研究社出版，p. 2.
西永良成（2000）「フランス文学」，原卓也，西永良成編『翻訳百年外国文学と日本の近代』大修館書店，pp. 49 － 65.
日本国語大辞典第二版編集委員会（2000）『日本国語大辞典第二版』小学館，第 9 巻 p. 349，p. 399，p. 467，p. 685，p. 1082.
野口富士男（1986）『荷風随筆集下』（全二冊）岩波書店，pp. 34 － 35.
日野強（1973）（伊犂（いり）紀行』芙蓉書房.
広瀬正宜，庄司香久子（1994）『日本語学習使い分け辞典』講談社，pp. 532 － 533.
二葉亭四迷，嵯峨の屋おむろ（1963）『二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』（明治文学全集 17）筑摩書房，p. 116.
北京商務印書館，小学館（2003）『中日辞典』（第 2 版）小学館，pp. 1338-1339.
正岡子規（1983）『俳諧大要』岩波書店，pp. 121-122.
松井栄一（2010）『ちがいがわかる類語使い分け辞典』小学館，163，373.
松中完二（2003）「翻訳と文化」『敬愛研究論文集』66，pp. 57 － 107.
松村明（2006）『大辞林』三省堂，p. 178，p. 747，p. 1915，p. 1967.
宮沢賢治（1974）『校本宮沢全集』（第九巻）筑摩書房，p. 222.
宮本百合子（1953）『宮本百合子全集』（第 15 巻）河出書房，p. 333.
森林太郎（1923）『鴎外全集第 10 巻』鴎外全集刊行会，p. 360，p. 443，p. 711.
同　　上（1972）『鴎外全集第七巻』（全 38 巻）岩波書店，p. 238.
諸橋徹次（1984）『大漢和辞典』（巻三），（巻六）大修館書店，p. 2403，p. 413.
山口翼（2016）『類語検索辞典日本語シソーラス』大修館，p. 301，p. 521，p. 652.
校注山室信一，中野目徹（2008）「征台和議の演説」『明六雑誌』（中）（全 3 冊）岩波書店，p. 214.
同　　上（2008）「貿易改正論」『明六雑誌』（中）（全 3 冊）岩波書店，p. 298.
〃　　〃（2008）「内地旅行西先生の説を駁す」『明六雑誌』（中）（全 3 冊）岩波書店，p. 337.
〃　　〃（2008）「政論二」『明六雑誌』（中）（全 3 冊）岩波書店，pp. 359 － 360.
〃　　〃（2008）「尊王攘夷説」『明六雑誌』（下）（全 3 冊）岩波書店，p. 414.

中国語
依斯哈別克 · 別先別克（2011）「英雄史詩《瑪納斯》国内搜集、出版、研究情況」，『民間文化論壇』，pp. 44-47.
後魏賈思勰撰，訳者熊代幸雄、西山武一（1959）『校訂訳注斉民要術』（下）農林省農業総合研究所，p. 20.
漢語大詞典編委員会（1997）『漢語大詞典』（第 1 巻），（第 2 巻），（第 9 巻）漢語大詞典出版社，p. 551，p.1031，p. 197.
［唐］魏徵，令狐徳棻撰（1973）『隋書』（巻四十一），（巻六十六）中華書局，p. 1181，p. 1558.
胡振華（1983）「柯族英雄史詩《瑪納斯》及其研究」『少数民族文学論集』pp. 30 － 45.
謝暁鐘著；薛長年，宋廷華点校（2002）『新疆游記』甘粛人民出版社.
（明）宋濂撰（1976）『元史』（巻七，巻六十五）中華書局，p. 133，p. 1636.
台北国立故宮博物院所蔵本（1987）「世宗憲皇帝硃批論旨」景印『文淵閣四庫全書』驪江出版社，第 418 冊，p. 571.

同　　上「陝西通志」（巻四十三）第553冊，p. 431.
〃　　〃「嶺外代答」（巻八）第589冊，p. 457.
〃　　〃「欽定大清会典則例」（巻一百五十四），第625冊，p. 70.
〃　　〃「欽定続文献通考」（巻二十九），第626冊，p. 724.
〃　　〃「皇朝通志」（巻一百二十五），第645冊，p. 672.
〃　　〃「万寿盛典初集」（巻二十八），第653冊，p. 310.
〃　　〃「農政全書」（巻二十七），第731冊，p. 382.
〃　　〃「本草綱目」（巻三十），第773冊，p. 638.
〃　　〃「西陂類稿」（巻二十五），第1323冊，p. 288.
元脱脱等撰（1977）『宋史』（巻三十八），（巻一七五）中華書局，p. 739，p. 4247.
元脱脱等撰（1975）『金史』（巻五十八）中華書局，p. 1351.
〔宋〕趙汝適原著，楊博文校釈（1996）『諸藩志校釈』中華書局，p. 118.
（清）陳元龍（1987）格致鏡原『四庫全書』第1031冊，p. 58.
晋陳寿撰，宋裴松之注（1959）『三国志』（巻三十）中華書局，p. 843.
〔明〕陳誠著，周連寛校注（2000）『西域行程記西域番国志』中華書局，p. 102.
唐姚思廉（1973）『梁書』（巻四十五）中華書局，p. 625.
羅会光（2008）「簡論維吾尔族飲食文化」『中国穆斯林』第4期，pp. 14-17.
厲声（2003）『中国新疆歴史与現状』新疆人民出版社，p. 5.
「愛漢語」http://www.aihanyu/org/cncorpus/cncindex.aspx

〔付記〕

本稿は、国家社科基金「叙事詩『マナス』の翻訳伝播と「マナス学」の発展に関する研究」（12XYY004）および陝西省教育庁哲学社会科学重点研究基地「『マナス』叙事詩とホメーロス風讃歌との関連研究」（16JZ053）による研究成果の一部である。

（2017年10月2日受理）

（すうん　しゅん　　西安外国語大学日本文化経済学院教授，本学交換教員）
（りあん　ぢぇんほい　西安外国語大学外国語言学・応用語言学研究センター教授）